

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 鷗沼 秀行

(記入日 : 2021 年 9 月 1 日)

1 教育の責任 (何をやっているか : 担当科目)

心理学統計法 (1 年前期必修科目 2 単位)、心理学統計法 (応用)(1 年前期選択必修科目 2 単位)、心理学実験 (基礎)(応用)(2 年前期必修科目、後期選択必修科目、各 2 単位)、認知心理学概論 (2 年前期選択必修科目 2 単位)、心理統計法特講 (1)(2)(大学院前期、後期選択必修科目、各 2 単位) など

2 理念 (なぜやっているか : 教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が科学的方法によって心を理解し、さらに自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的・文化的資源と積極的に関わりながら、主体的に問題解決に至る態度を身につけることである。

3 方法 (どのようにやっているか : 実践の工夫)

今年度前期は、昨年度に引き続き遠隔授業を MS365 の Teams を利用して実施した。Teams 内の「ファイル」にパワーポイントなどで作成した資料を用意し、Forms を利用した「課題」を毎回実施して学生に回答を求め、その結果を出席確認と平常点評価に活用した。心理学統計法においては、今年度の 1 年生から貸与されている iPad と Excel を使用させて統計計算を行わせた。心理学実験では、学生が自宅で実験をすることが可能な材料を用意し、ビデオで実験方法を指導した。レポートの提出、フィードバック、返却は、すべて Teams の「課題」を活用した。

4 成果 (どうだったか : 結果と評価)

心理学統計法においては、対面でエクセルを指導する機会があり、遠隔授業でも運営に大きな問題はなかった。基礎実験のレポート作成と提出なども、遠隔授業で可能であったが、レポートの質は必ずしも十分ではない例があった。また、演習や卒業論文の指導では、遠隔授業と対面が併用され、口頭発表の機会も設けることができた。(エビデンス 1)。

5 今後の目標 (これからどうするか)

後期も遠隔の可能性があり、課題提示や資料の作成にさらに工夫を加えたい。さらに、対面が可能になった場合には、対面授業と ICT を活用した授業方

法を総合して授業を運営する。心理学実験、演習、卒業論文指導などでは、遠隔を中心に、可能な限り対面も加えて個人指導を十分に行う。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 Office 365 Teams 各科目のグループ（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 西川 将巳

(記入日：2022年 2月 3日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<大学院>

#心身医学 (保健医療分野に関する理論と支援の展開)

#臨床心理実習 I (SuperVision / CasePresentation 指導)

<学部>

#心理実習 (入門)

#心理学ゼミナール

#健康・医療心理学

#精神疾患とその治療

#人体の構造と機能及び疾病

#スポーツ・健康心理学

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

自らが培ってきた心身医学的臨床・研究における知識や経験をもとに、臨床心理の道を志す学生や臨床心理に興味を有する学生達に、その有意義さや深淵さを心行くまで伝授すること。そして、人の心にしっかりと共感でき、心身の健康の大切さを理解し、社会に貢献出来得る後進の育成に携わること。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「心身医学」の講義では、まずその基本的な知識や技法を、単なる座学のみならず、様々な事例を提示したり、学生同士で Discussion させながら習得・習熟させるようにしている。「臨床心理実習 I」においては、実際に心理相談センターに来院されるクライアントのインテークに同席させたり、治療面接に携わらせている。さらに、その面接の都度、毎回、詳細かつ丁寧な SuperVision を行ない具体的、実践的指導を行っている。

「心理実習 (入門)」では、学部 1 年生に、しっかりと実習の心構えを指導・理解させた上で、実際の心理臨床の場を体験・見学させている。(今年度は新型

コロナのため、適宜、オンライン実習の形に切り替えた。)「心理学ゼミナール」では、学部3年生に心理学的研究の基礎を理解させ、具体的に論文・研究の進め方を指導している。(共に図書館へ行き、参考文献の調べ方を教示したり、生理学的機器の取り扱い方を教えた上で、実際にデータを取らせたり、そのローデータ処理の仕方や結果を解析ソフトを使いながら出力させ、さらにそれらのデータを統計ソフトを使い解析させ、その結果を考察させている。)

「健康・医療心理学」「精神疾患とその治療」「人体の構造と機能及び疾病」の3科目は、公認心理師受験資格に必修の科目であるが、心理師にとっても必要な医学的知識を、医師の立場から厳選して教授している。具体的には、「健康・医療心理学」においては、まさに心身医学の根幹である心身相関、即ちストレスと心身症状との関連について、心療内科医としてのこれまでの豊富な経験と知識から、具体的に様々な症例を示しつつ教授している。「精神疾患とその治療」においては、精神疾患の捉え方を、先ずは歴史的変遷の観点から説明しつつ、様々な精神疾患の特徴やその病理について理解させ、薬物療法のみならず、その心理的治療法について教授している。「人体の構造と機能及び疾病」においては、一般の教科書だけでは足りない解剖学的図譜を追加で示したり、DVDを聴取させたりしながら、イメージとして脳裏に定着できるような講義を行っている。

また、「スポーツ・健康心理学」においては、健康スポーツ医の立場から、スポーツと健康の関連を、医学的のみならず生理的・心理的側面からの知見を加えて、わかりやすく教授している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

大学院の臨床志望の学生たちの多くは、これまで臨床心理士や公認心理師の資格を取得し、様々な臨床の現場で活躍している。学部の学生も、公認心理師資格取得を目指している学生が増えて来ている。臨床以外の道を志す学生や医療秘書を目指す学生たちも、基本的な心理学的知識を身に付け卒業し、自らの志す道を歩み、社会に貢献している。

5 今後の目標（これからどうするか）

これまで通り、自らの教育理念のもと、真摯に、学生たちを教授して行きたい。学生すべてが、自らの目指す社会人として成長して行かれんことを願って

いる。今後も、そこが目標であることは変わらない。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

これは、私だけの力ではなく、多くの心理の先生方のご指導ご鞭撻のおかげであり、そして、何よりも修了生自身の努力の賜物であると思うが、これまで、当学大学院の修了生の 160 名以上が臨床心理士として社会で活躍している。また、多くの修了生が、近年、国家資格化された公認心理師資格を取得している。

<参考資料（一部）>

小島有里子・西川將巳「高齢者の認知機能障害と抑うつ状態からみた 4 類型の特徴」川村学園女子大学大学院研究年報（第 5 号）2016 年 1 月

藤井くるみ・西川將巳「就寝前におけるネガティブな反すうが抑うつおよび不眠に与える影響」川村学園女子大学大学院研究年報（第 7 号）2018 年 1 月

小島有里子・西川將巳ら「パーキンソン病及び、認知症を含むパーキンソン病関連疾患等における表情認知機能の特徴」川村学園女子大学大学院研究年報（第 8 号）2019 年 1 月

北島智子・田中裕・西川將巳「認知症高齢者における「タッチケア」のリラクゼーション効果」川村学園女子大学大学院研究年報（第 9 号）2020 年 1 月

利根川公子・西川將巳「強迫関連障害を呈する 60 代女性の面接過程—傾聴を主軸として—」川村学園女子大学心理相談センター紀要（第 17 号）2021 年 10 月

日沼咲・西川將巳「職場の人間関係を主訴に來所した 20 代女性の心理面接—怒りのコントロールについて—」川村学園女子大学心理相談センター紀要（第 17 号）2021 年 10 月

ティーチング・ポートフォリオ

田中 裕

(記入日：2021年9月1日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「心理学概論」「心理学実験（基礎）」「心理学実験（応用）」「神経・生理心理学」「心理学ゼミナール」生理心理学特講（1）」「生理心理学特講（2）」など。

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

教育理念・目標として、学生自身にも内在している身体および脳の視点から心を理解することを目指している。日常生活の中に根づいているこの視点を出発点として、自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的資源も使って主体的な問題解決に至る方向へ導くよう心がけている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

自身に内在する視点から主体的な問題設定から解決に至る機会を作るために、心理学概論では可能な授業テーマ全てにおいて脳や身体に帰結するようにした。心理学実験（基礎）では、自身の身体感覚を明確化して取り扱い、相互協力によるレポート課題解決から、心と身体感覚の関連を検討させた。神経・生理心理学では、脳・身体活動のデータ解析（2020年度は仮想データを使用）から心と身体の間連理解を促した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

心理学概論では、学修過程において脳や身体を心と関連づけて考えることが確認された。心理学実験（基礎）ではレポート作成時に配布資料を用意して内容理解の促進を心がけたが、十分な学修成果は得られなかった。神経・生理心理学では、データ解析技術の習熟度が低く、内容理解が浅くなってしまった。さらにこれらの成果に個人差が確認された（エビデンス1および2）。

5 今後の目標（これからどうするか）

どの授業においても、主体的な問題解決する方向を向かせることはできたと考える。しかし、基礎能力および興味・意欲の個人差が問題点として浮き彫り

になった。今後は個別指導も行いつつ、新たな資料も用意した上で事前事後学修も促して成果を高めたい。また、オンライン授業の方法もこの個人差に影響したと推測するため、授業方法の改善に努めたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）
- 2 小レポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ 心理学科 簗下成子（記入日：2021年1月22日）

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目） 心理学演習（3年通年必修科目 4単位）、心理アセスメント実習（3年通年選択必修科目 4単位）、臨床心理学実習（4年通年選択必修科目 4単位）、臨床心理基礎実習（大学院通年必修科目 4単位）、臨床心理実習 I(2)（心理実践実習）（大学院 通年必修科目 4単位）臨床心理面接特論 I,II、臨床心理査定演習 I,II（大学院前期、後期必修科目、各 2単位）精神医学（大学院前期選択科目）等

2 理念（なぜやっているか：教育目標） 教育理念・目標は、学生が臨床心理学の知識と実技を座学と演習、実習により習得し、習得した技術を心理援助に実践できることである。心理臨床専門家としての援助技法を習得する。さらに、臨床心理的援助法の開発と研究手法も身につける。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫） 演習授業の場合、学生が主体的に学べるように、実際に芸術療法実施前後の気分変化の採取データ等を用いて各種療法の効果などを記述させる。また、各種心理尺度を体験しフィードバック用のレポートを書くよう指導した。実習授業の場合、複数教員担当の授業などでは、教員同士のロールプレイを観察させた後に学生同士のロールプレイを実演し、振り返り、ディスカッションなどを経て心理臨床専門家としての技術を研鑽させた。特に今年度は、前期オンライン授業であったため、対面とは異なり、クライアント役の印象をカウンセラー役が拾うことが困難であった。しかしながら、対面演習ではありえないことであるが、ロールプレイ役以外の立場の学生が音声をオフにして、自分も一緒に練習できるため、対面演習よりも何倍も練習の場数を踏むことができた。

4 成果（どうだったか：結果と評価） 演習授業の場合、学生が積極的に文献検索やレビューを行い、問題を見出し、研究計画を立て、実際に調査できた。実習授業の場合、学生が実際に模擬面接を行い、インタビュー方法、利用者とのかかわり方、表現方法などを学ぶことができた。今年度は残念ながら新型コロナの影響から大学外部での実習を一部自粛したが、オンライン SV 大学院卒業生達の内容の濃い実践的な話を聞いてディスカッションする実習を行ってもらい、将来現場で知っておくべきこと、立ち居振る舞い、支援内容などを解説してもらった。そのことにより、例年よりも内容は踏み込んだものになり、単に見学に出かけるよりも現場で起こりがちな失敗や失敗をカバーする手法や、回避する技術をも学ぶことができた。後期になって対面カウンセリングを行ったが、学生の上達を体感している。

5 今後の目標（これからどうするか） 演習授業で授業外に個別に資料収集とレポート作成

を行う機会を増やす。またビッグデータ等の情報に普段からアクセスできるようにする。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

レポートへのリアクションペーパー（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

文学部心理学科

今井 正司

(記入日：2021年9月30日)

1 教育の責任 | 何をやっているか：担当科目

学部では、心理実習（入門）、心理実習（応用）、特殊研究、心理学ゼミナールの科目を担当している。大学院では、臨床心理学特論、臨床心理基礎実習、臨床心理査定演習Ⅰ、臨床心理学実習Ⅱ、臨床心理面接特論Ⅰ、心理学特別研究を担当している。

2 理念 | なぜやっているか：教育目標

担当授業における教育目標は、獲得された心理学の知見を実社会で生かすことのできる人材の育成である。担当科目は心理師の資格取得に伴う実習などを含めた専門的な科目ではあるが、履修学生の進路は多種多様である。しかしながら、心理学の知見を生かそうとする姿勢やそのプロセスを意識することは、「基礎知識に基づいた応用力」として現代の社会に求められる能力の一つである。そのため、履修学生の多様な進路にも対応できるような具体的なイメージを共有できるような展開を心がけ、学生一人一人が社会で活動できる能力を心理学を通して身につけられることに意識をおいている。

3 方法 | どのようにやっているか：実践の工夫

本年度から赴任したこともあり、学生の特徴などを十分に把握できていないわけではないが、興味関心やニーズにあった学びの場を提供した。具体的には、オンライン授業では、具体的な事例などを積極的に取り上げて、アクティブラーニングの様式でほとんどの授業を展開した。また、パワーポイントのスライドを写す形式だけではなく、iPadを板書代わりに用いたリアル感のある授業展開を心がけた。これらの「電子版書」は Teams を通じてダウンロードできるように設定し、復習の教材としても利用できるようにした。

4 成果 | どうだったか：結果と評価

アクティブラーニング形式の授業形態を展開したおかげで、その都度、学生からの質問などを受け、回答することができた。また、資料を Teams にアップしておくことで、振り返り教材として利用されていたことは、心理学の授業においては効果的な方法であることが確認できた。前期末のレポート提出においては、アクティブラーニングを行った成果が十分に反映された内容であり、自らリサーチクエスチョンを設定して、回答するというプロセスが十分果たせてい

た。

5 今後の目標 | これからどうするか

Teams と Zoom を活用した授業を展開してきたが、今後は Form を用いて小テストなどを行いながら、知識習得の状況を常に確認できるように取り組みたい。また、これまでの「電子版書」の方法は復習の教材として用いられてきたが、今後は、個人で運営しているウェブサイトなどで、授業に関連する情報に事前にアクセスできるような取り組みを積極的に行いたいと考えている。

6 エビデンスとなるもの | 資料の種類などの名称

a) Teams の記録 (非公開)

b) 前期末レポート (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

桂瑠以

(記入日：2021年9月1日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

「心理学演習」「コミュニケーション論」「統計と社会」「特殊実験演習」「心理調査概論」「特殊研究」「卒業論文指導」など

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

教育理念・教育目標として、学生が心理学、とりわけ社会心理学領域に係わる学修を通じて、社会の様々な事柄に対して広く問題意識を持ち、それらの問題を多角的に考え、主体的に問題解決を行い、社会に貢献していく態度や能力を身に付けられることを目指している。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

学生が主体的・実践的に学修を進めることを目指して、授業等での工夫を行った。一例として、心理学演習などの授業では、文献検索・収集、発表資料の作成、レジメによる発表、討論を対面及びオンラインでの授業にて行い、各自が問題意識を持って学修し、学習成果を学生相互で共有し、学修を深められるように指導した。心理調査概論などの授業では、オンラインを介してインタビュー調査を行い、調査の目的、調査方法、結果のまとめ方、データ処理の方法等を学修し、実際に各自で調査を実施して、レポートを作成するように指導して、心理調査の方法や仕組みを実践的に学んだ。また、コミュニケーション論、統計と社会などの授業では、講義にあわせて、毎回、小レポート課題やリアクションペーパーを課し、学修内容の深化を図り、また挙げられた質問には可能な限り次回の授業で回答や説明を行い、双方向のやりとりになるように努めた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

心理学演習、特殊実験演習、心理調査概論などにおいては、学生が主体的・実践的に学修を進め、授業時間外にも事前・事後学習を行い、教員からの指導や学生同士での支援を生かして、発表やレポート作成の質を高めていったことが確認できた(エビデンス 1, 2)。一方、学修成果や学修意欲に個人差が生じて

いる様子も見られ、個別の支援をあわせて行いながら、そうした差異に柔軟に対応していくことが今後の課題と考えられる。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生が、様々な社会事象や社会の問題に対して広く関心を持ち、自ら問題解決していけるような実践力を身に付けていくことが今後の目標に挙げられる。また、学修の意義や目的を理解し、自ら学修意欲を持って学修に取り組むよう、授業内容及び授業方法等を今後も工夫していくことが挙げられる。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 小レポート課題，リアクションペーパー(非公開)
- 2 前期末レポート(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 佐藤 哲康

(記入日：2021年9月28日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

青年心理学（2年後期選択必修科目 2単位）、心理演習（3年通年選択必修科目 4単位）、心理実習（基礎）（3年通年選択必修科目 1単位）、教育心理学（全学科共通教職必修科目、3年前期選択必修科目、1年後期必修科目、各2単位）、教育相談（全学科共通教職必修科目、2~3年後期必修科目、各2単位）、臨床心理面接特論Ⅰ・Ⅱ（大学院前期・後期選択必修科目 各2単位）、心理療法各論Ⅰ（大学院後期選択必修科目 2単位）、など

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

授業で目指す教育理念と目標は、心理学または教育学の専門性を活かすことができる人材を育成するために、これまでの臨床現場と地域での実践的な活動を通じて得られた経験を現状に即して伝えることである。社会に目を向けた応用力と柔軟な思考力を学生一人ひとりが身につけることも教育目標としている。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

昨年度後期に続き、今年度前期も遠隔授業が対面授業の質を維持されると共に非対面形式の特性を活かした授業ができるような方法と内容に変更した。特に学生の意欲と積極的な姿勢を期待するために心理演習と心理実習（基礎）、教育相談ではオンライン型アクティブラーニング、臨床心理面接特論Ⅰでは反転授業を導入した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

全ての担当科目でリアクションペーパーと授業アーカイブを利用し、学生の理解と復習に活用できるように変更した。リアクションペーパーは Microsoft Forms を利用して、授業内容のフィードバックと質問を求めた。質問については授業内で回答し、必要に応じて Microsoft Teams の各科目チャンネルに

回答を掲示・共有した（エビデンス①）。また学習の通信環境に不備が生じた学生に対応できるように授業は学生の許可を得て録画し、終了後に学生と共有した（エビデンス②）。期末に実施されたアンケート（エビデンス③）では、設問への回答だけではなく、自由記述にも評価を確認することができた。

5 今後の目標（これからどうするか）

前期に活用した **Teams** と **Forms** を対面授業の補助として継続する。一方、事前・事後学修を授業内で毎回確認することができず、授業内容の理解と定着に個人差が生まれているように思われる（エビデンス④）後期は授業で使用する配布資料は授業時だけではなく、**Teams** のチャンネルで学生に公開して予習・復習による効果的な学習の定着を目指したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① **Microsoft Teams** と **Forms** に設置したチャンネルと回答フォーム（非公開）
- ② **Microsoft Stream** の授業動画
- ③ 前期学生授業評価アンケート
- ④ 講義要綱（公開）

ティーチング・ポートフォリオ

松岡靖子

(記入日：2021年9月24日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

学部：基礎ゼミナール (1年前期必修科目2単位)、特殊実験演習 (3年通年選択必修科目2単位)、発達心理学 (2年後期必修科目2単位)、教育・学校心理学 (2年前期選択必修科目2単位) など

大学院：臨床心理基礎実習 (大学院1年前期選択必修科目2単位)、臨床心理実習・実習Ⅱ (大学院2年前期、後期選択必修科目各2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が心に関する幅広い知識を得ることによってその知識を通して学生自身の経験や世の中で起こっている問題を新たな視点から見つめ直し、更に主体的に問題解決の方策を探っていく方法と態度を身につけることを目標として教育を行っている。それにより川村学園女子大学が目指す、激しく変化する社会を柔軟に乗り越えるための「教養」を身に着けた自覚ある女性を育成することができると考えている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

どの講義においても、学生が心理学の知識を自分の経験や世の中の問題とつなげて理解することができるように、知識とつながる具体的な例を多くあげながら解説している。昨年度のオンライン授業の経験から、今年度は対面授業であってもオンライン授業であっても学生があまり違いを感じず、安定して学ぶことができるように授業形式を設定した。前期の一時期はオンライン授業が中心であったが、学生のネットワーク状況を確認し、一定時間のリアルタイム講義の時間を設けた。その上でネットワークの不調などもあり得ることから、1週間以内であれば何度でも授業内容を確認できるように録画動画も用意した。

対面授業時にはリアクションペーパーを用い、オンライン授業時には Microsoft Teams の Forms を用いて、1回の講義ごとに授業の振り返りコメントの入力を求めた。それぞれに記入された質問は可能な限り次回講義のはじめに取り上げて回答し、疑問を残しておかないようにするとともに、一方通行で

はなく相互のやり取りで講義が構成されるという実感を学生にもたせるように工夫した。

今年度から全新入生に iPad が貸与されることとなったため、基礎ゼミナールでは学生が iPad を使いこなすことができるよう、iPad の様々な機能を利用した課題を作成した。またオンライン授業によってミニレポートの課題が増えていることから、レポートの書き方に関する講義を例年よりも早めの 5・6 月に行った。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

講義形式の授業については、学生がそれぞれ自分の経験とつなげ合わせながら理解を深めていることがリアクションペーパーや Forms のコメントで確認された（エビデンス 1、2）。基礎ゼミナールにおいてはグループワークを行っていくうちに慣れ、仲を深めることができたとの感想が寄せられた（エビデンス 1）。

5 今後の目標（これからどうするか）

学生がより社会的事象に興味関心を持ち、心理学的視点から考えることができるように事前事後学修を具体的に促していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. リアクションペーパー（非公開）
2. Forms 記録（非公開）
3. 前期末レポート（非公開）